

同窓会

ニュース・レター

第5号

大阪大学
文学部
文学研究科
同窓会

2006年3月20日発行

昨年11月にお化粧直した文学研究科玄関



文学研究科玄関ロビーに掲げられた
研究科の歴史を伝えるパネル

重建懐徳堂復元模型

大正5年(1916)に建設された重建懐徳堂(ちょうけんかいとくどう)は、大阪の市民大学・文科大学として多くの市民に親しまれました。これは、平成17年10月に竹中工務店から寄贈された50分の1サイズの精密な復元模型です。文学部本館玄関ロビーに展示されています。

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部・文学研究科同窓会

URL

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/dousou/>

E-mail

dousou78@let.osaka-u.ac.jp

文学部玄関ロビーに 重建懷徳堂復元模型

文学研究科長・懷徳堂常務理事

柏木 隆雄

かつて教養部時代、憲法の落合先生や万葉の大養先生の講義をお聴きしたイ号館は、なおその大講堂は残って今も授業を受ける学生がいますが、一階は博物館となつて、例のマチカネワニの巨大な骨格のレプリカがのつしと横たわる部屋や鉱物、生物の標本の置き場となつており、私が学生時代には附属の病院として機能していた場所は医療短大になり、その医療短大が医学部保健学科となつて吹田に移つた後は「修学館」と名付けられて、博物館蔵の考古資料などを収蔵町の人々もよく訪れるコミュニティスペースとなつています。待兼山の景観も、昔泥道であるいた石橋交差点からの桜の道が、総長の発案でこの春からパリの街路並みに敷石で固めて傍らに新しく植樹された遊歩道としてお目見えすることになるなど、かつての様相が著しく変化を遂げようとしています。



プロフィール

昭和19年生。昭和44年大阪大学文学研究科仏文学専攻卒業。神戸女学院大学文学部助教授を経て現在本学文学研究科教授。著書「謎とき「人間喜劇」」（ちくま学芸文庫）、「評伝ジュール・ルナール」（臨川選書）など。

私たちの文学部本館も、玄関のロビーが昨年秋に新されました。太平洋戦争末期、昭和二十年の大阪大空襲で焼失した重建懷徳堂の建物（九二六建立）の青写真が、湯浅教授を中心として懷徳堂の文書類を調査する過程で発見され、施工にあたった竹中工務店のご厚意で、その復元模型（五十分の二）を作つて頂けたのです。これを玄関のロビーの真ん中に据え（かつて先生方のメールボックスが大きく立ちはだかつていた場所です）、向かつて左側の壁には、凸版印刷の協力で、左から江戸時代の懷徳堂、大正期からの重建懷徳堂、そして戦後の大阪大学文学部の歴史を絵や写真をちりばめたパネル三枚を掲げ、学生の皆さんにも、訪問の方々にも簡単に、また意義深くご覧頂けるようにいたしました。またこの改装にともなつて、玄関も新しくステンレスの看板に掛け替え、自動ドアの洒落た入口となつています。ぜひ同窓の皆さんのかつての学舎の変貌を実感していただき、合わせて懐旧の念にも耽つていただきたいと思います。

また懷徳堂はJCBと提携して、懷徳堂サロンを昨年から発足、京都、大阪の名所、名園、名料亭を会場に懷徳堂にちなんだ古典についての講演会を春秋二回、あるいは三回行っています。第一回は昨年五月阪大中之島センターでリーガロイヤルの昼食と湯浅教授と私のそれぞれ一



時間くらの話。二回目は昨年十一月京都法然院で平教授と私の話と「たん熊北店」の料理、第三回はこの四月十五日に円山公園の長楽館で私の話とフランス料理ということになっています。少し私が喋りすぎていますが、言いだしべえと言つてもあり、サロンが軌道に乗ればもう出番も無くなることと思います。

この四月から天野文雄教授が文学研究科長を勤められます。能楽研究の第一人者としての天野先生は、また洒脱なお人柄で、同窓会の発展にも大いに寄与していただけると期待しています。「無事これ名馬」を私流に解釈して、ほとと荷を下ろしますが、ぜひまた同窓会の総会で皆様にお目にかかりたいと思っています。

退職なさる先生方から

◆教養部イ号館

国文学・東洋文学講座教授 後藤 昭雄

二十三年間通った豊中キャンパスにあつて、もつとも好きだった空間は教養部イ号館である。大阪大学の歴史を感じさせる唯一の空間であつた(中之島にあつた旧医学部のキャンパスは私は知らない)。私は当初、教養部に赴任したので、研究室はこの建物の三階にあつた。高い天井、広い廊下・階段、階段の石の手摺り、重々しい木の扉、油の染み込んだような木の床、いずれもが重厚で、年輪を感じさせ、学生時代を過ごした九州大学の法文学部の建物を思い出させた(彼は旧制帝大、これは旧制高校であるから、大きさはもちろん異なるが)。研究室も広い部屋に合部屋で、教官三人と若い女性の補佐員の四人が一緒にいて、今のそれぞれが個室であるのとはずいぶん違つた雰囲気があつた。ことによく出入りした国史研究室では、昼休みになると、東洋史、西洋史の教官も集まつて、食事をしながら談論風発。説話が作り出されていく場は、おそらくこんなものだったのではないかと思つたものである。

建物の裏手にある小さな森も心安まるものだった。楠や桜、公孫樹の太木の間八つ手、金木犀、枇杷、竹などが混じり、小さな森を作っている。研究



1970年九州大学大学院博士課程単位取得退学。1982年文学博士(九州大学)。鹿児島県立短期大学、静岡大学、大阪大学教養部を経て1990年文学部教授。著書に「大江匡衡」(2006)他。



室が今の実践センターに移つてからも、イ号館での授業は毎年あつたが、研究室から教室へは、いつも裏手を通つて建物へ入つた。近道であるからでもあるが、それより、始まる前も終わつた後も、その木々の下を歩くのが心落ちつくからであつた。

◆幸せな人生

芸術史講座教授 若山 映子

数カ国でつい最近実施されたアンケートは、努力や向上を理想と考える日本の高校生が諸外国に比べて少数になつたことを示しているようですが、少なくとも私の周辺の学生さんたちは、大志を抱いて研究に嬉々として勤しんでいるようです。しかも近年は日本でも、女性や障害者も法律に護られて、熱意と実力を示しさえすれば、希望を実現できるのです。

一九七六年四月、新設間もなく所属の学生数も少なかった大阪大学文学部美学科の助手に迎えられた私は、二時限目には文学部の数人の先生方と合研の小林さんのご希望でイタリア語の講習をおこない、時には先生方のお手伝いがてら学生たちと机を並べて講義に耳を傾けノートをとる、学生と共に復習に励み、助手の雑務をこなしながら、楽しい五年間を過ごしました。その後「五六豪雪」から解放されたばかりの福井大学教育学部に赴任して、予測もしなかつた長期入院と手術の繰り返し後に、雪国での一人暮らしを医師から禁じられて辞職を決意した折も折、一九九〇年、大阪大学に助教として招かれました。

ただその時には、私が女性で、しかも両足不自由な身体障害者であるという



京都市立美術大学西洋画科卒業、ミラノ・カトリック大学で学位取得、同大学で助手。帰国後、福井大学を経て本学文学部に着任。2005年『シスターナ礼拝堂天上画一イメージとなった神の慈悲』を上梓。

理由から、文学部教授会は大変な決断を迫られたという事情を、当時学部長であられた信多先生から最近伺いました。その私が無事定年まで勤め上げて、退職前にライフワークを上梓できたことを喜んで、先生は、長らく封印しておられた秘話をうち明けてくださったのでした。実際六三年の私の人生を振り返つてみると、突然眼前に現われる巨大な壁と、それを通り抜ける新たな道の発見の連続でした。そこにいつもあるのは、全力でぶつかる私に向かつて差し伸べられる周囲の方々の暖かい手でした。人は独りで生きられない。そして自分だけの人生はない。多くの人と手を取り合つて、人生のすべてを分かち合つてこそ、終着駅に近づいて振り返ったとき、幸せであつたと心から納得できるのではないのでしょうか。

❖ 変身する阪大英文科

この文章を書いている私が阪大英文科に入学したのが三十年ほど前であるから、今こうしてここに勤める私は、五十八年の歴史を持つ英文科



1983年・英文科大学院卓球大会

の約半分の歴史を目撃してきたことになる。英文科の歴史がまだまだ長くないということなのか、それとも私がそれだけ齢を重ねたということなのか、さてどちらであろう。阪大キャンパス内は驚倒

するほど変わったが、文学部の建物はトイレが全面改修され、エアコンが完備された以外(?)それほど外見は変わっていない。阪大キャンパスを長く訪れていない方は、阪大の変貌ぶりや文学部の無変貌ぶりに愕然とされることだろう。私などはこの古風な建物こそ文学部らしい、これで良いのではないかとも思うが、若い学生たちは、どんどん新しくまた華美になる阪大キャンパスに比べて古い文学部に不満を漏らしているようだ。

だが実際には、文学部また阪大英文科は、外見からはいかがい知れないほどの変化を遂げている。そもそも変化と脱皮を繰り返すことで生き延びてきた歴史を持つ阪大である以上、文学部も英

文科も変化を受容し脱皮せざるを得ない。英文学講座のみで発足し(一九四八)、英語学講座が立ち上がり(一九六〇)、さらにはアメリカ文学講座が新設され(一九九三)で、現在の英文科の姿があるのだ。変化に対応しながら、その変化を果のあり変身に転化する苛烈な奮闘が要請される時代となり、確かに私の入学した頃の牧歌的な英文科と今の英文科とを比べると、伝統は継承されながらも、隔世の感がある。大阪外国語大学との統合を控えて、またしても新たな変化を発展に変えていく局面に立っているのが阪大英文科の今である。

英文科の学生たちも時代の変化を感じているのか、昔に比べると時代の雰囲気は敏感な、また文学部ソフトボール大会で連続優勝することが示すように、「体育会系」のたくましさを持った人が増えてきた。先輩諸氏には、優秀な英文科の学生諸君の必ずしも明るくない就職活動にあたってお力を貸していただければ



2004年・卒業論文の書き方指導会

幸いです。私の学生時代より間違いないく優秀である学生・院生たちに、輝かしい将来が拓かれるのを祈るばかりである。

(服部 典之)

研究室今昔

❖ イン哲の「いま」



恒例の研究室ハイキング(2005年5月)

「研究室今昔」というテーマでは、あるが、私が学部生としてイン哲に出入りし出したのは一九九五年からである。つまり私の周知するのはせいぜいこの十年のため、「今」はともかく「昔」を書く能力がない。よって「今」の体制を僅かにお伝えすることしか出来ないが、どうかご了承願いたい。現在本専修は、榎本文雄教授、堂山英次郎講師、河崎豊助手の三名によつて運営されている。榎本教授は初期仏教、特に雑阿含経の研究が専門である。演習では主にパーリ聖典の講読を担当しているが、仏典のみならずジャイナ教文献・ヴェーダ文献をも視野に入れた幅広い見地からの総合的な理解を目指すことが至上命題である。演習では一言半句も揺るがせにせぬ厳密なテキスト読解で緊張の連続だが、幸いにもこのハードルを跳躍せんとする有望な学生に恵まれ、極めて活発な議論が演習中常に展開される。さて榎本教授の着任後、十年ほど教員一名のみ

の体制が続いていたが、二〇〇四年に堂山英次郎講師が着任し、専修として教育の幅が広がった。堂山講師はインド・イラン学を専門とし、リグヴェーダに現れる二人称接続法の研究で学位を取った風貌爽やかな気鋭の若手である。演習ではブラーフマナやリグヴェーダの講読を担当しているが、比較言語学の深い学殖に裏打ちされた講義中の議論は、常に学生の手本であり目標である。そして助手の河崎豊は初期ジャイナ教聖典の研究に従事し、特に在家信者観の解明に力を注いでいる。以上に述べた教育・研究体制から明らかな如く、現在の本専修は「ヴェーダの思惟から初期仏教・ジャイナ教思想への展開」という、インド思想史上極めて重要な潮流を歴史的に悉く押えた、世界的に見ても稀な構成を取っていることが最大の特色と言えよう。かかる体制の下、教員学生ともども研鑽する毎日であるが、最近では「現代的課題に対応しうる文献学」をも模索し、アップデートな学問の可能性を追求している。

(河崎 豊)



堂山講師の演習での一コマ

卒業生近況

グータラ主婦の取り越し苦労？

寺木 篤子(旧姓野上)

もうはるか四十年前以上前の学生時代。専攻は社会学、森東吾先生と甲田和衛先生の原書講読では予習に苦しみられ、特に厳しい甲田先生には、自分でも意味不明の訳読をいつ叱られるかとドキドキでした。

卒業後、大阪市職員として福祉行政に従事しましたが、大学で学んだのは理論社会学。社会福祉の知識については皆無だったので、福祉現場での仕事は日々とても新鮮でした。経済は高度成長期、新しい福祉施策が充実されていき、活気に溢れていました。

今から約四年前に早期退職したのですが、通算して最も長く従事したのは、憲法第二十五条の生存権保障の具体制度である生活保護行政で、他には母子福祉、高齢者福祉、人権行政などにも携わりました。社会体制に憤りを感じたり、生活困難に陥った人達、或いは差別されてきた人々の生き方に感銘を受けたり、時には人間の醜さ

ノンフィクションから フィクションへ

安江 俊明(紙島 創)

私が一回生だった一九七〇年は、三月から大阪万博が開かれ、三十一日に日航機「よど号」乗り取り事件が発生しました。

その後放送局に入社して主に報道部に勤務し、十年後の一九八四年、初めての北朝鮮取材の折、「よど号」乗り取り犯とヒョンヤンで会いました。四時間にわたる会見中、彼らは「アフリカなど第三世界を中心とする自主の流れ」を説き、日本の権力者が思っているように世界は決して動



寺木篤子(旧姓野上)
1968年文学部(哲学科)卒業。
1969年大阪市に就職、福祉関係行政に従事。2002年退職。現在無職

弱さに自分を鏡に映されているようで嫌悪したりと、とにかく笑ったり泣いたりしながらの仕事でした。最後の仕事も生活保護ですが、ホームレス問題と深く関わったものでした。大学入試で来阪した時に地下街で見かけたホームレスの人達がいつしか見えなくなり、そして今当りと比較にならないくらい多くのホームレスの姿、思いは複雑です。

景気の好・不況と反比例的にサポートを必要とする人の数が変わり、施策は逆に拡充・緊縮と変わる現実の矛盾。蛇行を繰り返しながらも社会は良い方向へと進んでいくのでしょうか。それとも・・・？退職したグータラ主婦は、つい取り越し苦労をしてしまうのです。

色々なことを教えた場

森 裕一

学生時代は楽しかった。ただ授業とりわけ演習は厳しく、テキストは難解、博士の諸先輩まで一緒であまりのレベルの高さに四苦八苦したものです。しかし「ホンマに難しいけど、なんとかせな」という原書講読によって得た忍耐力、空っぽに近い頭でも(脳という)「物質と記憶」さえあれば応用できるのだという捨身の論理的思考、またある助手さんからはファッション、料理、ワインの重要性まで(感謝！)・・・こうした体験は、私が大学院で美学に移り博士課程にまでよじ登る原動力となりましたし、私の画商、アート・マネジメントの仕事に多くのエッセンスとなっています。アートと多種多様な分野とが錯綜するアート・マネジメントは、自らの専門性を持たねば異分野間との差異を認識できず、成功しません。ですから哲学、美学という専門知識を得られたことは大きかったです。エージェントをつとめる映像作家スタジオ・アズビーのエルメ

スとのコラボレーション展覧会への協力。建築家リチャード・ロジャース、美術家黒田アキの京都南山城小での大コラボレーション、日本料理アカデミーを結実された京料理菊乃井御主人等による饗宴「醍醐寺カルティエ宝飾デザイン展」パーティー、また若手美術家、パラボネルと玩具株式会社タカラトミーとのプロジェクト、京都文化博物館内でのアート・シヨップ・アートン。以上のようなディレクションは、若輩の私には荷の重いものでしたが、学んだ忍耐力が一番役に立ったかもしれませんね。また窮地に立たされた時、哲学こそが休息を与えてくれる省察という稍となっていくような気がします。



森 裕一
大阪大学文学部哲学科哲学哲学史第一講座卒業、大阪大学文学研究科美学修士課程修了、大阪大学文学研究科美学博士課程単位取得退学。
mori yu gallery 代表。



安江 俊明(紙島 創)
1950年 京都市に生まれる。
1973年 大阪大学文学部卒業(英語学)。
同年 毎日放送入社。報道番組などを制作。
現在 製作局番組アドバイザー。



ラスに描いてみました。ご読を。

就職ガイダンス特集

◆同窓会が文学部教育支援室と共催で「就職ガイダンス」開催

初めての試みとして文学部同窓会と教育支援室との共催で、平成十七年七月二十一日、「就職ガイダンス」が開催されました。夏休みをまわかに控えた暑い日の午後、大学院生・学部生が約七十名出席、三時間にわたる熱気に溢れた催しになりました。ドイツ文学専攻博士前期課程を修了されて現在ソニーの人事部にご勤務の松井富美子さんに就職活動にあたっての心がまえについて講演を頂きました。引き続き日本史専修を卒業されサントレヴィジョンにご勤務の平山容子さん、日本史専攻の博士前期課程を修了され現在大阪市立図書館の司書をなさっておられる鶴谷真紀さんには、ご自身の就職活動体験談を披露していただきました。それぞれのお話のあと熱心な質疑応答が続きましたが、昨今の厳しい就職状況のなか、自分の力で自分の人生を切り拓いて行こうという、文学部学生・文学研究科院生の真摯な姿勢が印象的でした。

専門知識を超えた「ヒューマンスキル(人間力)」の大切さを力説された松井さんのお話は、出席者に深い感銘を与えました。平山さん、鶴谷さんの就職活動の体験談はたいへん具体的に、「等身大の」身近な実例がとてども参考になり面白かったと好評でした。

「文学部に進みたい」と言えは、「どうやって食べていくの」と問いつ返され、「そーら来た」とばかり「金銭は木の葉のごとく軽し」と胸をはって嘯っていた時代もそれはそれで懐かしい。とはいえ、志のみ高くして現実感覚において欠くところなしとなかった文学部卒業生が、一般企業からは何となく疎んじられ、限られた職種(教育職か公務員か)にしか人生の活路を見出せないで来たのも無理からぬところ。しかし、時代は大きく変わりました。文学部の学生・院生も今は大いに多様化し、各人の個性や特技、専門知識に応じて、自分をいざばん活かせる分野は何かを真剣に考え模索し始めています。そんななかで、一般企業への就職を希望する人もどんどん増えています。(実際、企業の採用も増えています。)

法律や経済の専門知識も大切でしょう。しかし、二元的な価値観(原理主義)の支配によって、社会全体も硬直化し急速に活力を失いつつある現代、二見ノンシヤランでいて、じつはきわめてセンシティブ、思っても見ない創造性を秘めた文学部卒業生、これを活用しない手はないことが次第に常識になりつつある、と言ったら、ちょっと言い過ぎでしょうか。有為の人材を埋もれさせないように、文学部・文学研究科同窓会を中心にできる限り就職支援の手を差し伸べていきたいものです。

(林 正則 記)



これだけは人に譲れない、
そんな何かを見つけたこと

松井富美子

二〇〇五年六月中旬、独文学部研究室の林先生から突然お電話をいただきました。就職ガイダンスでの講演の依頼でした。私は、二〇〇〇年に就職して以来、人事の仕事に携わっています。最初の五年は採用担当をしていたので、その経験を活かすことをご期待いただいたのだと思います。

ただ、お電話をいただいたのは私が転職してまだ三週間の頃で、「ただの先輩」としてならお話ができます、ということでお引き受けしました。ところが、いざとなると会社の名前を背負わずに存在する私、というのは大変頼りなく小さい存在で、「ただの先輩」として語る言葉を探すのは本当に困難な作業でした。そして、その戸惑いこそが、学生の皆さんがこれから仕事を考えようとするときに感じる不安と似ているように感じました。

多くの学生にとって、就職活動は「自分は何をしたいのか」「何をすべきか」「何ができるか」という問題に初めて真剣に

向き合う機会です。

私も、「将来の夢」を堂々と語る友人を心からうらやましく感じたものです。学生るときはどうやって答えにたどり着くのか



まったくわかりませんでしたし、今でも模索中です。これからまだまだ模索していくと思います。

でも、大学の名前や会社の名前が取れなくても、いつも語るべき言葉があるような、自分自身の中に財産とパワーを持ち続けられるような仕事をしていたいと今は考えています。現役学生の皆さんも文学部の良さ―概念思考や論理的な表現力、他人理解・共感力などを活かしつつ、これだけは人に譲れない、と思う何かを見つけてる道程を歩いていただきたい、と心から願っています。



松井 富美子(まつい ふみこ)
2000年文学研究科博士前期課程(ドイツ文学)修了。セイコー・インスツルメントを経て、現在ソニー人事部勤務。

前向きな第一歩を

平山 容子

小さい頃から何事にも思いこみの強い性格だった私は、就職活動でも例にもれず、何かを伝える仕事が見たい。マスコミに就職したい！と途に思っていました。昔、テレビで海外からの中継を見て感動したのが、そもそも私がマスコミを意識するようになったきっかけです。そんなわけで、マスコミ以外の企業を考えていなかった二〜三年前の私。

何とか希望がかない、この会社で働いて、ほぼ二年が経ちました。

入社した頃は、正直驚きの連続でした。会社の中には、私が知らない多くの仕事があったのです。私が配属された編成部もそのうちのひとつ。よく、「局の対外的な窓口」と言われる部署だそうです。



そういう部署で、私は番組のPRをしたり、キャンペーンの企画に加えてもらったり、日々あたふたしながら働いています。あれほどこだわっていたのに、希望と配属先の部署は違い、納得できない時期もありました。ですが、二年とはいえ様々な経験をさせてもらい、今はこの仕事が好きになっています。

就職活動中、ある友人が「今って、つらいけど自分の将来をどうとでもできる、すごいいい時期やんな」と言いました。大変励みになったので今も強く心に残っている言葉なのですが、加えて言うなら、入社してからでも自分の道はどうとでもできるものではないでしょうか。就職活動中はどうしても「ここで自分の人生が決まるんだっ！」と肩に力が入りがちですが、就職活動ははじめの第一歩。これから就職活動をする皆さんには、まずは「ここで頑張りたんだ」という気持ちを大事にして、前向きな第一歩を踏み出して欲しいな...と思っています。



平山 容子 (ひらやま ようこ)
2004年大阪大学文学部日本史学科卒業、同年サンテレビジョンに入社。

自分のすべてをぶつけて —私の就職体験記—

鶴谷 真紀

私は司書として大阪市立図書館に就職して2年になります。現在勤務している中央図書館は、大阪が生んだ大文人、木村兼葎堂(けんかどう)の邸跡地にあります。近世大阪の出版史をかじった私は、ゆかりの地で働ける幸せをかみしめながら、毎日市民の皆様の情報活動のお役にたてるようがんばっています。

就職するなら、人や社会に貢献できて喜ばれる仕事、と決めていた私ですが、大学に入学した当初は、実は教員志望。これは「女性が一生働くなら教員！」と話してくれた高校時代の恩師の影響です。しかし大学三年も半ばになってから、ふと図書館での就職を意識するようになりました。特に公共図書館なら、赤ちゃ

んからお年よりまで、すべての世代の生涯学習を支えることができます。それに、日本史学専攻で学ぶ古文書の知識、小学校から続けた演劇、人と話すのが好き。そんな私のすべてを活かせるのではないかと考えたのです。

そこで学業の傍ら、近畿大学の通信教育で司書資格・司書教諭資格を取得

しました。一方で大学と大学院を通じて出版史の研究を続け、社会科・地歴科教員の専修免許、学芸員資格も取得しました。専門性を高めるだけでなく、大学図書館の夜間アルバイトもさせていた

できました。とはいえ、大学院生としての研究と就職試験勉強の両立は非常に大変でした。司書の正職員の求人はいほんのわずか。焦りの中で、なすべき事を見失い、迷走する大学院2年間でしたが、周囲に支えられながらあきらめずに試験と論文に取り組み、修論提出後にはなりました。がどうにか内定をいただくことができました。

これから就職試験を受けられる皆さんも、大学で得られる貴重な知識や資格、経験を大切に、目標をあきらめずに進んでください。社会で活躍する皆さんの手助けができるよう、私も腕をみがいていきます。



鶴谷 真紀 (つるたに まき)
2002年 大阪大学文学部卒業(日本史学専攻)。
2004年 大阪大学大学院文学研究科修了。
同年より大阪市立図書館利用サービス課に勤務。司書。

待兼山遺跡の発掘調査

阪急石橋駅を降りて、豊中キャンパスに向かう坂道。通称「阪大坂」の左手に、かつては医療技術短期大学の構内だった緑豊かな森が広がっているのを覚えておられますか。じつはその森のなかには、数多くの埋蔵文化財が眠っていて、「帯は「待兼山遺跡」として国の文化財台帳に登録されています。

その「阪大坂」周辺ではいま大規模な修景整備工事が進んでいます。桜が咲く頃には驚くほどに装いを一新した新「阪大坂」がお目見えすることになっています。

このたびそのための事前発掘調査が実施され、古墳（待兼山五号墳）、中世の火葬墓群、江戸時代の土坑墓など三つの時代の遺構が見つかって、とても大がかりな調査になりました。

古墳は直径二五mで五世紀後半の築造。馬形、家形、円筒形など、いろいろな種類の埴輪がたくさん出土しました。火葬墓群は三〜四世紀のもの。火葬灰が詰まった長さ六m以上の大きな坑が確認されており、大規模な火葬墓群が周辺にも広がっていることがうかがえます。江戸時代後期の残りの良い棺桶も見つかっています。

これらの調査成果はテレビ、新聞などでも報道され、雨天にもかかわらず現地説明会には二百名近い方々が参加されました。

今回発見された待兼山五号墳と中世火葬墓群は関係者のご尽力で地中保存されることとが決まりました。埋蔵文化財調査室では、解説板の設置や遺構位置の地表表示などによって、遺跡の情報を修景整備のなかで生かせるよう工夫したいと考えています。

(福永 伸哉・寺前 直人)



火葬灰の詰まった坑 (13~14世紀)



雨中での現地説明会



待兼山五号墳の全景 (5世紀)

事務局便り

◆名簿について

二〇〇二年度版「大阪大学文学部・文学研究科卒業生・修了生名簿」を購入希望の方は事務局までご連絡ください。同窓会会員に限り版価(四千元)＋送料(二百九十円)でお送りいたします。終身会費(二万円)をお支払いいただいた方には無料でお送りいたしますので、通信欄に名簿希望の旨お書き添えください。数に限りがありますので、品切れの場合はご容赦ください。終身会費のお支払い、名簿の代金振込は左記の郵便振替口座にお願いいたします。

口座番号 09401179043

加入者名 大阪大学文学部同窓会事務局

●お願い

住所変更の際には必ず同窓会事務局までご報告ください。その際に名簿への住所電話番号等の記載を希望されない方はその旨お伝えいただければ承ります。ご協力よろしくお願ひ申し上げます。事務局への連絡はお手数ですがメール、またはお葉書にてお願ひします。

●募集

◇「ニューズレター」の「卒業生の近況」への投稿を募集しております。ご自身の写真一枚と六十字程度の原稿を事務局までお送りください。

◇同窓会の名称を募集しております。採用者には図書券一万円分を贈呈。現在次のような名称が寄せられています。

- ・「待兼山・鰐の会」、「待兼山・わいの会」
- ・「大阪大学待兼文学会」
- ・「待兼青山会」、「待兼山青山会」
- ・「待兼文壇」、「浪速にワニ会」
- ・「待兼会」、「文待会」、「待兼会」
- ・「待兼グラフィティ」、「待兼いちよう会」

ご応募くださった皆様ありがとうございました。新たな名称のご提案、これまでの候補に対するご意見等ございましたら、事務局までお知らせください。以上、皆様からのご応募お待ちしております。

●事務局メンバー

- 事務局長：林 正則(S四十二)
- 総務・服部 典之(S五十六)
- 会計・和田 章男(S五十五)
- 企画・立案・岸田 知子(S四十五)、志水紀代子(S四〇)、宮本 孝二(S四十八)
- 広報・入江 幸男(S五十二)、大西 愛(S四〇)
- アルバイト職員：武内 正美(H十二)

- 住所：大阪大学文学部・文学研究科同窓会…豊中市待兼山町二番五号 〒560-0832
- ホームページアドレス…<http://www.letosaka-u.ac.jp/dousou/>
- 事務局メールアドレス…dousou78@letosaka-u.ac.jp